

# 三島由紀夫の『金閣寺』

群馬大学社会情報学部  
モルナール・ゲルグー・アダム  
14687001

## 目次

序章.....	3
第1章 作者の伝記.....	5
第2章 建築としての金閣寺.....	9
第3章 小説の解釈.....	11
第4章 『金閣寺』の映画化.....	16
第5章 美をモチーフとした他の作品.....	17
第6章 結論.....	19
参考文献.....	22

## 序章

このテーマを選んだ理由は、三島の小説の魅力である。『金閣寺』を最初に読んだ時、話に本当に興味を持ち、非常に面白いと思った。この小説が日本の文学の中で一番好きなものになった。私にとってもっとも面白いことは、主人公のモチベーションである。なぜ主人公は金閣寺を燃やしたか等ということである。

この論文の目標は色々である。論文の構成を説明しておきたいと思う。

まず、筆者の伝記について書きたいと思う。三島由紀夫の人生と本小説との関係についても述べたい。

次に本当の金閣寺の歴史についても簡潔に書くつもりである。例えば、誰が造ったのか、機能は何であるか等である。実際に起きた有名な事件である 1950 年の焼失も述べたいと思う。

次はもっとも大きい部分である。これは小説の内容であり、最初に小説の内容を簡潔にまとめる。次に、小説の構造や大事な点や場面を詳しく分析する。そして、主人公である溝口の性格や感情や態度、人間関係（友達、親、先生、女性に対して）を詳しく分析する。最後に主人公の金閣寺に対する観念や感情を説明する。その際、次の問いを設定したい。

- 主人公のどもりはどのように彼の人生に影響するか。
- 主人公が金閣寺を燃やす理由は何であるか。
- 主人公に影響されたことは何であるか。
- 仏教はどのように小説に現れるか。
- 小説に出てくる仏教の話は何の意味があるか。
- 美はどのように小説に現れるか。
- 美と悲劇は何の関係があるか。等

そして、『金閣寺』に基づいた映画についても触れたいと思う。例えば、市川崑の 1948 年の『炎上』や 1976 年の『金閣寺』や Paul Schrader の 1985 年の『Mishima: A Life in Four Chapters』という映画についても述べたい。

次に美のテーマという点で共通する他の作品と比較したい。例えば、坂口安吾の短編小説『桜の森の満開の下』や Thomas Mann の『ヴェニスに死す』(Der Tod in Venedig)、Patrick Süskind の小説『香水 ある人殺しの物語』(Das Parfum - Die Geschichte eines Mörders)、Peter Shaffer の演劇『エクウス』(Equus)などである。

そして最後に結論として、設定した問いの答えを考察する。なぜ主人公は金閣寺を燃やしたか。この語<sup>かた</sup>りの意味や意義は何であるか。この小説で美は何を意味するか。美と人生の関係は何であるか。

## 第 1 章

### 作者の伝記

三島由紀夫 (1925 年～1970 年)

三島由紀夫は日本の作家の中で、優れた代表的な著者の一人であると言える。40 冊の小説や 20 巻の短編小説や 18 冊の戯曲を作った三島は、この間、役者としても、監督としても活躍し、また、剣道やボクシングやボディービルをやった。(Murray 2007, pp. 85)

三島由紀夫は 1925 年 (大正 14 年) に、東京に生まれた。本名は平岡公威であった。(谷沢永一 2008, pp. 139)

三島は、生まれた後に間もなく、精神病的な祖母<sup>そぼ</sup>に取られ、12 歳まで育てられた。祖母が病気により、子供を育て続けることができなかつたため、三島は母に取り戻された。そして、若い三島と母は不自然に仲良くなった。三島の子供の時の個人的な体験が、作品に大きい影響を与えた。(Murray 2007, pp. 85)

父の影響により、東京大学の法学部へ進学した。(小川義男 2014, pp. 203) 卒業の後、大蔵省に勤め始めるも、8 か月で辞め、小説家として生活し始めた。(小川義男 2003, pp. 151)

16 歳で書いた『花ざかりの森』という作品で滅びの美学に対する関心が現れていた。(川島周子 2009, pp. 154) 川端康成は三島と三島の作品に関心を示し、三島は川端康成の弟子とも呼ばれている。

1952 年に、27 歳で、ギリシャに旅行し、そこで、古代的なギリシャ人の「精神と肉体の均整」という思想が三島に大きな影響を与えた。この旅の後、自分の体を強くし始め、ボディービルダーになった。その上に、裸体を写真に撮らせ、ナルシズムを強調した。(川島周子 2009, pp. 155)

1958 年に、杉山瑤子と結婚した。(Murray 2007, pp. 86)

1960 年代に、高く評価されている多くの戯曲を書いた。(Murray 2007, pp. 86)

ノーベル文学賞候補に3回もなった。しかし、受賞はならなかった。(小川義男 2003、pp. 151)

1968年、「楯の会」という民兵組織を設け、1970年に三島事件を起こした。三島事件とは、1970年(昭和45年)11月25日に、三島が「楯の会」の会員とともに陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地へ行き、総監を人質にとった事件であった。三島はバルコニーから演説し、自衛隊に対し、クーデターを起こすよう呼びかけた。しかし失敗し、切腹で自殺した。(谷沢永一 2008、pp. 39)

## 文体

三島のテーマはほぼ社会の不道德や退廃である。スタイルについては、立派な文体で作品を書いた。昭和精神史の他に、文学においても、武士道においても優れた作家であった。(小川和佑 2004、pp. 120) 的確な比喻で、登場人物の心理分析で小説を書いた。(川島周子 2009、pp. 154) 人生で一貫して文学的な美を追求した。国家主義に興味があった。(あんの秀子 2014、pp. 85)

## 作品

日本の戦後の状況において、虚無的かつ反道德的な視点で、美的な作品を作り始めた。最初の重要な作品は1949年に発刊された『仮面の告白』である。三島はこの作品で有名になった。24歳で書いた『仮面の告白』は半自伝的小説である。(川島周子 2009、pp. 154)

### 『仮面の告白』

この小説の主人公は自分の同性愛の感じを隠してみており、自分の性格を分析し、また、暴力的な死で亡くなりたいと願う。(Murray 2007、pp. 86)

### 『豊饒の海』

四部作であり、『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』からなる小説である。内容は、主人公の裁判官の友人が、全巻で他の個人として生まれ変わる。四部作の転生の物語によって、1912年から1975年までの日本の衰退を表している。

### 『午後の曳航』

この話で、ある13歳の少年は母親の恋人を妬（ねた）み、この感情はついにひどい行為をもたらす。少年と母親の仲の良さは、三島と母親の関係と重ね合わせることができると思われている。

### 『潮騒』

ギリシャに旅行した時に書いた本である。内容は、ある島に住んでいる二人の若者の恋についての話である。この小説は、基本的に紀元前1世紀以前にギリシャ語で書かれた『ダフニスとクロエ』に基づく。(川島周子 2009, pp. 155) この作品は三島の唯一の純粋なラブストーリーだとされている。(Murray 2007, pp. 86)

### 『美德のよろめき』

人妻の浮気を描写している作品である。谷崎潤一郎の影響があるだろう。(川島周子 2009, pp. 155)

### 『鏡子の家』

この作品のキャラクターは四人がいる。全員が三島のオルター・エゴだという。戦争にある死が懐かしいビジネスマン、最右翼団体に入るボクサー、画家、そして、自殺にこだわっている役者である。この作品から三島の運命が予想されるとされている。しかし、『鏡子の家』は文学界で批判され、失敗作とされた。(Murray 2007, pp. 86)

### 『憂国』

武断的な短編小説である。これが世界的でもっとも有名な短編小説だと思われている。

多くの戯曲も書いた。(小川義男 2014、pp. 203)

### 『わが友ヒットラー』

1968年に作られた戯曲であり、世界でもかなり有名な作品である。評価によると、ファシスト的とも反ファシスト的とも解釈されている。

### 『サド侯爵夫人』

夫が幽閉されている間のサド侯爵夫人の人生に基づく戯曲である。サド侯爵夫人の苦勞を紹介する作品で全キャラクターは全員女性である。三島によると、全員のキャラクターが人間の一つの性格を象徴する。



三島由紀夫の遺影

<https://shroudedwaypoints.files.wordpress.com/2014/05/yukio-mishima.jpg>

(2015年7月17日にアクセス)



## 第2章

### 建築としての金閣寺

金閣寺は京都の代表的な建築の一つであると言える。この寺院は、京都を訪れる観光客の重要な目的地に違いない。金閣寺の歴史は三島の小説上ばかりではなく興味深い。

金閣寺は公式には「鹿苑寺」だと呼ばれている。京都市北区にある。仏教の禅の宗派である臨済宗に所属する。

貴族の西園寺 公経（さいおんじ きんつね）の地所で、北山の近くに建てられた。1397年に、室町幕府3代将軍の足利義満は金閣寺を手に入れ、自分の隠宅として「北山殿」になった。足利義満の死後（1408年）、北山殿は寺院になり、新たな名称は鹿苑寺になった。鹿苑寺の最初の貫主は夢窓 疎石（むそう そせき）という禅僧である。

応仁の乱の時、金閣寺は深刻な損害を受けたが、室町幕府9代将軍の足利義尚は金閣寺を回復した。1565年の火事で、金閣と不動堂だけが助かった。1950年に、火事で焼失してしまった。金閣寺放火したのは若い学生の林養賢であった。金閣寺に勤めていた僧侶は仏教のモラルの低下と商業化への反対として金閣寺を燃やした。1955年10月に、金閣寺は創建当時の姿に復元された。

金閣寺は金箔に覆われた3階建ての建物である。初層は「法水院」と呼ばれ、寝殿造りで造られた。この階に、阿弥陀仏の像がある。二層は「潮音洞」と呼ばれ、武家造りで造られた。三層は「究竟頂」と呼ばれ、舍利殿のスタイルで造られた。

金閣寺の頂上に飾られた金の鳳凰像が復興を象徴している。面白いことに、金閣寺は、鳳凰と同じように、火で滅ぼされ、後（のち）に再現された。(Reischauer 1983, pp. 213)



現在の金閣寺

[https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/19/2011\\_Kinkaku-ji\\_in\\_Kyoto\\_1.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/19/2011_Kinkaku-ji_in_Kyoto_1.jpg)

(2015年7月17日にアクセス)

## 第3章

### 小説の解釈

#### あらすじ

主人公は僧侶の息子の溝口である。子供の時、父からよく「金閣寺ほど美しい建物はな  
い」と聞かされたことから、金閣寺のイメージが想像に密着する。溝口は父が亡くなった  
後、金閣寺の学僧になる。鶴川という友人と仲良くなる。金閣寺で禅の法話など様々なこ  
とを学んだ。溝口の心の闇は大きくなり、金閣寺を訪れるアメリカ人の兵士の日本人の恋  
人に対し、ひどい仕打ちをする。大学に入り、新しい友人を作り、柏木という人物ととも  
に哲学的な話をする。溝口は女性との性交を何度も試みるが、そのたびに目の前に金閣寺  
の幻覚が現れ、不能になる。後（のち）に、鶴川の死を知る。その上に、老師に対して、  
次第に敵意を感じるようになる。故郷に帰り、三日間を由良で過ごし、そこで日本海を眺  
めながら、金閣寺を燃やすことを思いつく。老師から預かった金を遊女に使う。ある高名  
な僧侶との不思議な話を経て、ついに金閣寺を滅ぼすことを強く決意する。周到な準備の  
後（のち）、ある夜、金閣寺に放火する。

#### 登場人物

##### 溝口（主人公）

僧侶の息子であり、金閣寺の学僧である。溝口は子供のころから、金閣寺の美しさに引  
き付けられた。惨めな生活を送り、心理は次第に悪くなっている。

外見については、溝口はかなり醜く、吃音という障害があるので、それが様々なコンプ  
レックス（例えば、劣等感）やフラストレーションをもたらす。その上、子供の時、多く  
の人にかからかわれていた。

性格については、内向的であり、執着と疎外感をよく感じる人物である。公共物汚損を  
やりがちな人物である。（子供の時、海軍候補生にかからわれその持ち物を壊したことが  
ある。）

周りの人々から愛情を受けていないことから、惨めな人格になる。彼は人間関係でもうまくいかない。両親に対して、愛を感じない。教師に対して、次第に敵意を感じるようになる。子供の時、近所の女の子が溝口に対してひどい扱いをした結果、溝口はその女の子を呪う。金閣寺の学僧の時、溝口の行動は以前よりひどくなる。例えば、金閣寺を訪れるアメリカ人兵士の願いに応じて、兵士の妊娠している恋人の腹を踏む。

金閣寺に対しての感情は矛盾を表す。金閣寺を憧れると同時に憎む。金閣寺を最初に見る時、自分の想像と比べ、あまり美しいと思わない。金閣寺が空襲で全焼することについて空想する。金閣寺は、溝口の日常生活を送ることや人間関係、また性的な関係を妨げる。例えば、性交を試みても、目の前に金閣寺の幻覚が現れ、不能になる。(川島周子, 2009, pp. 155)(あんの秀子, 2014, pp. 85)

### 鶴川

溝口の親切で陽気な友達であり、心のよりどころである。彼も金閣寺の学僧である。楽観的であり、積極的であり、明るい性格を持っている。鶴川のみは、溝口の吃音を気に留めることなく、ありのままの彼を認める。溝口は金閣寺に対して感じている憧れについて、鶴川のみに話す。

事故で亡くなる。溝口は自らの父の死に際しても泣くことはなかったが、鶴川の死に際しては、涙を流す。溝口にとって、鶴川は太陽の光であり、鶴川が死んだら、光もなくなる。溝口の暗さと鶴川の明るさはお互いを完成させる。溝口は鶴川が個性と特殊性に欠けることをうらやましがる。鶴川は溝口の良い自我を象徴しているのではないかと思われる。鶴川が亡くなると、溝口はその良い自我を失う。(あんの秀子, 2014, pp. 85)

### 柏木

溝口の冷笑的な友人であり、大学の同級生である。二人は、よく哲学的な話をする。柏木は溝口に重要な影響を与える。足の障害(先天性内反足)があり、女性を得るためにこの障害を逆手に取って利用する。方法は、女性に情けを感じさせることである。

鶴川は溝口の良い自我であり、柏木は溝口の悪い自我であると思われる。なぜかという  
と、二人は障害があり、女と性交する時、不能になることがある。柏木によると、溝口は  
自らの障害を利用して目立ちたいと思っている。しかし、柏木も障害を利用して目立つ個  
人になりたがっている。彼は自分が普通の人ではないと主張している。（あんの秀子、  
2014, pp. 85)

## 重要な場面

### 金閣寺への最初の訪問

金閣寺を最初に訪問する時、溝口にとって、寺は美しくない。夢で想像した金閣寺の姿  
と比べ、現実の金閣寺は、小さく、暗く、古い建物である。

この考え方はプラトンの「イデア論」と関係があると思われる。プラトンによると、イ  
デアは物の完璧な姿である。しかし、イデアの世界は人間の世界の外にある。実際に見ら  
れる物は偽物のイメージに過ぎず、イデアではない。つまり、完璧ではない。溝口は現実  
の金閣ではなく、イデア上の金閣に美を見出すのである。

### 「無門関 第十四 南泉斬猫 - 南泉の斬猫 - 」という禅の話の解釈

あらすじ：ある寺院に猫が現れ、僧侶の間で喧嘩が起きる。僧侶の南泉は猫を捕まえ、  
大衆に対し、「一言を言ったら、この猫を殺さないが、言わなかったら、殺す。」と問う。  
誰も何も言わないため、南泉は猫を殺す。その夜、趙州という弟子が寺に戻ってきた時、  
南泉が意見を聞くと、趙州は何も言わず靴を頭の上に置いて、立ち去った。「あなたがこ  
こにいたら、猫は救われていただろう」と南泉は思う。

この話の解釈は小説で何回も出てくる。柏木によると、その猫は美の象徴である。「猫  
を殺すことは解決だろうか。」と問う。猫は死んだが、猫の美が残っている。趙州は靴を  
頭の上に置き、解決の浅薄さを皮肉で見せる。趙州によると、美が起こす苦しみを我慢し  
なければならない。今は、柏木は南泉であり、溝口は趙州であるが、後で、逆になる可能  
性がある。（もちろん、溝口は南泉になり、猫を殺し、つまり金閣寺を燃やす。）

### 溝口の日本海への旅行

興味深く、不思議な場面である。主人公が日本海へ旅行し、海を見ると、金閣寺を燃やそうという意志は強くなる。溝口は自分の不幸や暗い心、そして醜悪さの原因は日本海だと思ってしまう。

### 遊女との関係

溝口は、実際に生きていたいと思い、遊女を訪れる。今回は不能になるのが怖くない。この童貞喪失の時に、これまでのように金閣寺が現れることはなく、吃音と醜悪さが消失する。

溝口は、実際の性交は想像したより激しくなかった。想像の中で全部のことは現実よりさらに激しく、きれいである。金閣寺のことと同じように考える。

### 禅海和尚との話

溝口は金閣寺放火の直前、禅海和尚とかなり不思議な話をしている。その僧侶によると、溝口は完全に平凡であり、性格が単純だとのことである。それを聞いた溝口は、自分が完全に理解されたと感じる。

### 金閣寺への放火

放火を準備している時、溝口は今までの人生でもっとも大きな幸福を感じる。今回は暗い金閣寺の美が全く見えない。しかし、記憶にある寺の美が思い浮ぶと、金閣寺は再び美しく輝き始める。金閣寺はまた最後に美で、溝口を「不能」にしようとする。彼はあいまいになるが、臨濟録（りんざいろく）の文を思い出す。

「裏に向ひ外に向つて逢著せば便ち殺せ。佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺して、始めて解脱を得ん。物と拘はらず透脱自在なり」（石川淳 1973, pp.270）

そして力を得て、金閣寺に放火する。燃えている金閣寺の中で死のうとするが、究竟頂

に入れない。死ぬことは無理と悟り、燃えている金閣寺から山へ逃げる。ついに、自殺を  
思いとどまり、生きようと悟る。

## 第4章

### 『金閣寺』の映画化

『金閣寺』に基づいた映画は三つある。

まず1948年に、市川崑という監督が『炎上』というタイトルで、『金閣寺』を基にした映画を作成した。市川崑の映画に出てくる発想は小説の発想とかなり違うと思われる。この映画では主人公と親の関係が強調されているが、小説では主に主人公と金閣寺の関係が重要である。その上、映画の終わりでは、主人公は自殺をして亡くなるが、小説の終わりでは、反対に主人公は生きようという意志を持つ。それが大きい相違点である。

他の映画化作品は高林陽一が1976年に作成した『金閣寺』である。この映画のあらすじは原作の小説と同じだと言える。

最新はPaul Schraderというアメリカ人の監督が1985年に作成した『Mishima: A Life in Four Chapters』という作品である。この映画では三島由紀夫の人生と作品を通じて『金閣寺』の話も紹介される。全編において抽象的・象徴的な撮影がなされたアメリカの映画である。



## 第5章

### 美をモチーフとした他の作品

『金閣寺』に出てくる美のモチーフと関連する他の作品との比較のため、一つの日本の作品と三つの西洋の作品を取り上げる。この四つの作品では、美と人生の矛盾が現れる。これらの作品は美を崇拝する人間の失敗を表す。

一番目は、坂口安吾の『桜の森の満開の下』という短編小説である。この名作で、主人公は桜に対し恐怖の感情を抱く。一般的には桜は美を象徴するが、この物語では恐ろしいものになる。『金閣寺』の主人公と同じように『桜の森の満開の下』の主人公も美に対して矛盾した感情がある。美は二人の人生を破壊する。どちらの話でも悲劇が起こり、『金閣寺』の主人公は金閣寺を燃やし、『桜の森の満開の下』の主人公は恋人を殺す。

二番目は、Thomas Mann の『ヴェニスに死す』(Der Tod in Venedig)という短編小説である。Mann の本で美は美しい少年として現れる。『ヴェニスに死す』の主人公はその少年に対して愛を感じる。主人公の人生にその少年の美は大きい影響を与える。しかしその美には死も伴っている。悲劇は、物語の終わりに主人公がコレラで亡くなることである。

三番目は、Patrick Süskind の『香水 ある人殺しの物語』(Das Parfum - Die Geschichte eines Mörders) という小説である。この小説の香水を作る主人公は完璧な香水を探している。『金閣寺』の主人公と同じように完璧さを追う。問題は完璧さを追いながら、生きるのを忘れることである。終わりに悲劇が起こる。

四番目は、Peter Shaffer の『エクウス』(Equus)という演劇である。この演劇は三島由紀夫の『金閣寺』との類似点が非常に多いと思われる。どちらの物語も、主人公はもっ

とも執着するもののために生き、命を供える。『エクウス』の主人公アランは宗教を深く信じる若者であり、馬に愛情を注ぐ。(彼にとって馬が神様として現れる。) どちらの話の主人公も、愛情を注ぐ対象が正常な生活を送るのを妨げているように感じた結果、その対象を攻撃する。溝口は金閣寺を燃やし、アランは馬の目をつぶす。つまり、どちらの主人公も、自らにとってもっとも大切なものを壊すのである。

## 第6章

### 結論

Ross (1959) によると、金閣寺に対する放火が象徴するものは三つである。

一つ目は、若い日本人の仏教のような厳しい戒律に対する反逆である。二つ目は、若い日本人の戦後の虚無主義（ニヒリズム）である。三つ目は、ある個人の心理的で劇的な詳しい分析である。

さらに、Ross (1959) が指摘するのは、この小説で禅が誤解されている部分があることである。その誤解は精神的な病気を持つ人間にとって、虚無主義（ニヒリズム）に至る。

(Nancy Wilson Ross, 1959, pp.vii-viii)

#### 溝口と金閣寺の関係

溝口は子供のころから、金閣寺の美しさに引き付けられた。想像でも、夢でも金閣寺の理想を見る。現実の金閣寺を初めて見る時、自分の想像と比べ、金閣寺が全く美しくないと思う。

金閣寺の学僧となった時、金閣寺に対しての感情は矛盾を表す。金閣寺を憧れると同時に憎むようになる。しかし、金閣寺に対しての憧れは彼の醜悪さの根源である。溝口は金閣寺が空襲で全焼することについて空想する。金閣寺は、溝口の日常生活を送ることや人間関係、また性的な関係を妨げる。例えば、性交を試みても、目の前に金閣寺の幻想が現れ、不能になる。

ある日、溝口は金閣寺に対し、怒鳴る。「いつかきつとお前を支配してやる。二度と私の邪魔をしに来ないやうに、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」と溝口は言う。

(石川淳 1973, pp.164-165) 後に、金閣寺を焼こうという決意が次第に強くなる。

金閣寺を焼く前に、溝口は大きな幸福を感じる。

寺は最後に目の前に美しく輝き、溝口の決意は一瞬、揺らぐ。しかし、臨濟録（りんざいろく）の文を思い出す。

「裏に向ひ外に向つて逢著せば便ち殺せ。佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、しんけんに逢うてはしんけんを殺して、始めて解脱を得ん。物と拘はらず透脱自在なり」(石川淳 1973, pp.270)

金閣寺を焼き、新しい人物になりたく、新しい生活を送りたく、平常に生きたい。

「...生きようと私は思った。」(石川淳 1973, pp.274)

金閣寺を焼く行為は欲望を捨てることを伴う。溝口は自我を消すに至る。

### 『金閣寺』と仏教・禅の発想

まず、小説に出てくる「南泉の斬猫」という禅の話で、簡単に言えば、猫が美の象徴である。また、欲望の象徴である。お坊さんたちは、猫のことについてけんかするから。猫が殺されたら、欲望もなくなる。この話は溝口の行為を予想している。

また、禅の本質は特殊や形に欠けることであるとされている。溝口は鶴川が個人性と格別に欠けることにずっとうらやましい。禅海和尚と話す時、その僧侶が「溝口は完全に平凡であり、性格が単純みたい。」と言ったら、溝口は自分が完全に理解されたと感じる。溝口は特殊がなく、平凡になりたかったから。

最後に、金閣寺に放火する前に、臨濟録(りんざいろく)の文を思い出し、行為を遂げる。

「裏に向ひ外に向つて逢著せば便ち殺せ。佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺して、始めて解脱を得ん。物と拘はらず透脱自在なり」(石川淳 1973, pp.270)

つまり、自由になるために、物に密着する欲望を捨てる必要がある。

### 『金閣寺』に出てくる美の発想

溝口は(金閣寺の)美に近づくことができないので、フラストレーションを感じ始める。

金閣寺の美は、溝口にとってしばしば変化する。時に美しく、時に美しくない。例えば、最初に見たときは、現実の金閣寺より、想像した金閣寺のほうがきれいであった。

この考え方はプラトンの「イデア論」と関係があると思われる。プラトンによると、物の完璧な形のことをイデアと言う。しかし、イデアの世界は人間の世界（感覚世界）の外にある。実際に見られる物は偽物のイメージであり、イデアの影に過ぎず、イデアそのものではない。つまり、完璧ではない。もちろん、美にもイデアがある。この理由で、溝口は現実の金閣寺より、自分で想像した金閣寺のほうが美しいと思う。

柏木によると、知識があれば、美をもっと知るようになる。それは、プラトンの考えと同じである。

## 参考文献

- 谷沢永一 (2008) 『名作の書き出しを誦んじる』 幻冬舎
- 小川義男 (編) (2014) 『日本人なら知っておきたい、あらすじで読む日本の名著』 KADOKAWA pp.203
- 小川義男 (編) (2003) 『あらすじで読む日本の名著 No.3』 中経出版 pp.151
- 小川和佑 (監) (2004) 『あらすじで味わう名作文学、古今東西の名著三〇選』 廣済堂出版
- あんの秀子 (2014) 『マンガでわかる日本文学』 池田書店
- 川島周子 (2009) 『おとなの楽習 10、文学史のおさらい』 自由国民社
- 石川淳、他 (監) (1973) 『三島由紀夫全集第十巻』 新潮社
- Murray, G (2007) *Exploring Japanese Literature, Read Mishima, Tanizaki and Kawabata in the Original*. New York: Kodansha USA
- Reischauer E. O. et al. (ed.) (1983) *Kodansha Encyclopedia of Japan*. Vol.4, Tokyo: Kodansha
- Nancy Wilson Ross (1959) "Introduction" In Yukio Mishima *The Temple of the Golden Pavilion* Rutland, Vermont & Tokyo, Japan: Charles E. Tuttle Company. pp. x-xix
- <https://shroudedwaypoints.files.wordpress.com/2014/05/yukio-mishima.jpg> (参照 2015-7-17)
- [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/19/2011\\_Kinkaku-ji\\_in\\_Kyoto\\_1.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/19/2011_Kinkaku-ji_in_Kyoto_1.jpg) (参照 2015-7-17)